

氏名（本籍）	林 始恩
学位の種類	博士（言語学）
学位記番号	博 甲 第 7204 号
学位授与年月日	平成 27 年 3 月 25 日
学位授与の要件	学位規則第4条第1項該当
審査研究科	人文社会科学研究科
学位論文題目	親和的關係における否定的評価の研究 — 日韓母語話者の言語行動の比較 —

主査	筑波大学 教授	博士（言語学）	砂川 有里子
副査	筑波大学 教授	博士（人文科学）	一二三 朋子
副査	筑波大学 准教授	文学博士	金 仁和
副査	筑波大学 講師	博士（学術）	澤田 浩子

## 論文の要旨

親しい間柄同士の会話では、相手をけなしたり相手に対して悪態をついたりすることが親愛の情の表現と理解され、友好関係の形成に役立てられることがある。その一方で、けなしや悪態にかかわる否定的評価の表明は、相手のフェイスを傷付け、人間関係を危うくする危険性をはらんでいる。このような危険性は、異文化接触場面では一層高まることが予想される。

このような背景のもとに、本論文は、日本語と韓国語のそれぞれにおいて、親しい友人と会話を行う時の「否定的評価」の言語行動を分析し、出現状況・出現パターン・表現形式・否定的評価に至るまでの手続き・否定的評価後の補償行為といった観点からの考察を試みる。本論文の目的は、親しい友人同士の否定的評価の表現の仕方や談話的な特徴を記述し、日本語と韓国語による否定的評価に関わる言語行動の相違点を分析することにある。分析の対象とするのは、日本語母語話者の日本語による会話と韓国語母語話者の韓国語による会話を書き起こしたデータである。

本論文の構成と各章の概要は以下の通りである。

第1章 研究の背景と目的

第2章 先行研究と本研究の位置づけ

第3章 研究方法

第4章 否定的評価の発話状況と日・韓の比較

第5章 自然会話における否定的評価の表現形式 — 疑問文を中心に —

第6章 相手の否定的側面を語る談話の組み立て方

第7章 否定的評価後の FTA 補償行為

第8章 本研究のまとめと今後の課題

第1章では、本論文の背景と目的、および各章の概要が述べられる。

第2章では、談話研究の既存のアプローチが紹介され、本論文の分析手段について述べられる。また、対人

関係調整理論である「ポライトネス理論」、日・韓言語行動の対照研究、「親しさ」や「評価」に関する先行研究が検討され、本論文の位置づけが行われる。

第3章では、会話データの収集方法と文字化の方法が示され、本論文の分析項目である「否定的評価」の発話の定義と判断基準が提示される。

第4章では、収集した会話データを分析し、否定的評価の出現状況と出現パターンについての考察が行われる。その結果として、(1)行い手主導の否定的評価、(2)受け手の言動に対する否定的評価、(3)受け手の自己否定に対する同調という3つのパターンが提示される。さらに、日本語母語話者には「(3)受け手の自己否定に対する同調」が多いが、韓国語母語話者には「(2)受け手の言動に対する否定的評価」が多いという出現パターン別頻度数の調査結果が示され、日本語母語話者にとって韓国語母語話者の否定的評価が唐突できつく感じられることの原因についての考察が行われる。

第5章では、直前の発話や行動に対する否定的評価の表明に疑問文の形式が多く使用されることが提示され、通常の「質問」として用いられる疑問文と「非難」として用いられる疑問文との違い、および、「非難」として機能する疑問文の発話の組み立てについて考察が行われる。その結果、通常の「質問」は欠けている情報を聞き手に求める行為であるのに対して、「非難」として用いられる疑問文は欠けている情報を求めるものではなく、相手の直前の言動を言語化したり解釈しながら確認を行ったり、相手の直前の言動の意味や理由を問うものであることが示される。

第6章では、否定的評価の発話が出現するまでに、話し手と聞き手の間で行われる手続きについての分析が行われる。その結果、談話導入時にネガティブなことについて言及することを予告するための前置き表現が行われていることや、話し手が行おうとすることが敏感なものであることを表示する手段として、沈黙・言いよどみ・語尾の伸ばしなどによって発話を遅延させているという観察が示される。一方、聞き手の側も、相手が敏感さを表していることを察知し、余談や脱線を行うことで否定的評価の発話を遅延させているという観察が示される。

第7章では、否定的評価が行われた後に、相手のフェイスを回復させるために話し手が行うFTA補償行為について、および、FTA補償行為における日本語母語話者と韓国語母語話者の相違点についての分析が行われる。まず、FTA補償行為として(1)当該の否定的側面に肯定的な側面もあることを述べる、(2)相手の立場から弁解する、(3)取り上げた否定的な側面を自分も持っていることを述べる、(4)否定的側面が現在は改善・解消されていることを述べる、(5)相手の他の側面を褒める、(6)自身の判断を疑う、という行為が行われていることが示される。次いで、日・韓のFTA補償行為のタイプ別頻度数を調査し、(4)否定的側面が現在は改善・解消されていることを述べたり、(1)当該の否定的側面に肯定的な側面もあることを述べたりする点では日・韓ともに共通していること、日本語母語話者は(3)取り上げた否定的な側面を自分も持っていることを述べることが多いが、韓国語母語話者は(5)相手の他の側面を褒めることが多いことが示される。これらの観察から、日本語母語話者は自身がへりくだることで、韓国語母語話者は相手をほめることでFTAを補償していると述べられる。

第8章では、本論文の内容がまとめられ、本論文の意義と課題について述べられる。

## 審査の要旨

従来、対人関係に関わる表現の研究は、敬語や婉曲表現などの丁寧さを表す表現の研究が中心とされていたが、近年、自己開示表現や方言語彙の使用など、親しさを表し、心地よい人間関係を築くための表現が注目されるようになってきている。そのような流れの中に位置づけられるのが、本論文の否定的評価の研究である。これまで、「評価」の言語行動に関する研究は、肯定的評価である「ほめ」に偏っており、否定的評価を詳細に論じた本論文は、関崎（2014）の否定的評価の研究と共に先駆的研究であると言える。

本論文の功績は、日本語と韓国語における否定的評価の使用の実態を比較し、親しさを表す否定的評価について、日本語母語話者と韓国語母語話者の言語行動の差異を実証的に記述した点にある。特に、否定的評価が出現する状況において、日本語母語話者は「受け手の自己否定に対する同調」を行うことが多いのに対し、韓国語母語話者は「受け手の言語行動に対する否定的評価」を行うことが多いという観察をもとに、それぞれの言語文化圏で行われる否定的評価行動の違いを記述した点や、否定的評価によって脅かされたフェイスを補償する FTA 補償行為において、日本語母語話者は「自身がへりくだること」を行うことが多いのに対し、韓国語母語話者は「相手をほめること」を行うことが多いことを明らかにした点など、日韓の異文化接触場面で誤解の原因となりかねない言語行動の特徴を明確にした点が高く評価できる。相手の私的領域に触れないようにする日本語母語話者と、相手の私的領域に触れようとする韓国語母語話者、あるいは、ネガティブフェイスを優先させる日本語母語話者と、ポジティブフェイスを優先させる韓国語母語話者といった指摘はこれまでもなされているが、本論文が明らかにした日韓両言語の特徴は、否定的評価という側面から従来の指摘に新たな知見を加え、コミュニケーションスタイルの研究に貢献するものとして評価できる。

一方、日本語母語話者の会話を分析した第5章の議論は、全体の議論の中で十分に活かされていると言い難い。第5章では、自然会話において疑問文が相手への非難の表明として用いられることが多いという現象に関して、質問ではなく非難として理解される条件を解明し、非難の表明に疑問文が多用されることの原因を考察するという、それ自体としては興味深い議論がなされているのではあるが、その考察の論文全体の中での位置づけに問題が残る。この点については、今後、韓国語母語話者によるデータとの突き合わせを行い、両言語の自然会話の比較を行ったり、自然会話と実験的に収集した会話データを比較したりすることによって、今後の研究のさらなる発展につながるものと考えられる。本論文は、言語学の知見のみならず、異文化理解教育への応用にも資する優れた研究であり、今後のさらなる発展が期待できる。

## 2 最終試験

平成 27 年 1 月 22 日、人文社会科学研究科学学位論文審査委員会において、審査委員全員出席のもと、本論文について著者に説明を求めた後、関連事項について質疑応答を行った。審議の結果、審査委員全員一致で合格と判定された。

## 3 結論

上記の論文審査ならびに最終試験の結果に基づき、著者は博士（言語学）の学位を受けるに十分な資格を有するものと認める。